2013 12/24
No.1961
毎月第2・第4火曜日発行

政経かながわ

一般社団法人
—神奈川政経懇話会—

三浦海岸（三浦市）の浜辺で、冬の風物詩「ダイコンの天日干し」がピークを迎えている。取れたてのダイコンを２本一組で束ね、海岸に設置した鉄パイプにつるし、５、６日間干す。さらに10日間ほど樽（たる）に漬け込み、浅漬けのたくあんを作る。

神奈川新聞社

2013 12/24 No.1961

政経かながわ

contents

視点・点描 3
大震災と「鞍馬天狗」90年

講演録 4
「安倍政権の改革の方向性と成長戦略」
東海大学教養学部教授　　新保　恵志

経　済 8
企業倒産、14年は反転増も
注目は消費増税、金融再編

国　際 10
民営化遅れる中国水事業
政府の役割見直しを

くらし2013 12
健康寿命をのばそう

広告珍談 14
～うまい物がたり㉙
受賞だ！受賞！

NNAアジア経済リポート 15

ミャンマー経済セミナー講演録 16
「ミャンマー　経済・社会の変化」
国際機関日本アセアンセンター貿易投資部
上席プロジェクト担当官　広瀬さやか
「ミャンマー文化と日本」
共同通信社ミャンマー経済クラブ
アドバイザー　　イアン・トゥー

神奈川景気データファイル 18

事務局だより

◇**横浜定例講演会**
2014年1月29日（水）
14時～15時30分
横浜情報文化センター　6階
「情文ホール」
講師は全日本男子柔道監督、
東海大学講師の井上　康生氏
演題は「夢への挑戦～私の柔道人生」

視点点描

大震災と「鞍馬天狗」90年

今年は関東大震災から90年。東日本大震災の記憶がまだ生々しいこともあり、メディアも盛んに取り上げた。そんな折、大佛（おさらぎ）次郎記念館で「さあ、次は鞍馬天狗90年ですね」と、当然のように言われた。なぜそこで黒頭巾の人？　けげんな当方に「関東大震災がなければ鞍馬天狗は生まれていなかったんですよ」。以下はその話。

「鞍馬天狗」で小説家として世に出て、その後「天皇の世紀」「パリ燃ゆ」など史伝を残した大佛次郎（1897～1973）。本名は野尻清彦。壮年期のエッセーに「『鞍馬天狗』を書くようになったのは地震のせいだけである」という印象的な一文がある。

野尻青年、震災時は満25歳。東大卒業後、外務省条約局の嘱託職員をしながら、雑誌に海外文学の翻訳ダイジェストを書き、学生結婚した妻と鎌倉に住んでいた。そこへ震災。借家は半壊。鉄道が不通となり、外務省に通うのも一苦労。つまりは被災者となったが、これを機に勤めを辞し、筆で身を立てようと決心する。それなりの実績はあった。

だがあてにしていた雑誌は震災のため、廃刊。懇意にしていた編集者は新講談の雑誌「ポケット」に異動となり、「髷物（まげもの）（講談物、時代物）の原稿なら拝見しましょう」と野尻青年に告げる。暗に縁切りを宣告した、という見方もある。今まで書いたことのない世界、だが背に腹はかえられぬ。震災の年の暮れ、短編を仕上げて持ち込んだところ採用され、次に書いたのが鞍馬天狗が登場する読み切り「鬼面の老女」。主役ではなかったが、編集者はダイヤの原石を見逃さなかった。ぜひ鞍馬天狗を主人公にして続きを書けとせかし、1924年5月号に掲載されたときには「快傑鞍馬天狗　第一話　鬼面の老女」と題する続き物になっていた。幕末の志士、鞍馬天狗の誕生である。鎌倉長谷の大仏にちなんだペンネームも「ポケット」への持ち込みから使い始めた。

「だから、関東大震災90年と鞍馬天狗90年はつながっているんです」と記念館職員氏。鞍馬天狗が世に出たのは震災の翌年だが、その元はまさしく震災にある。震災がなければ、野尻青年が文筆の道に進んだとしても、時代小説を手掛けることはなかったろう。人生、どう転ぶか分からない。ちなみに横浜・山手にある記念館では没後40年企画「『鞍馬天狗』誕生90年」展を3月まで開催中だ。

（神奈川新聞社文化部長　青木　幸恵）

宮野　力哉

受賞だ！受賞！

しょうゆを、「おしたじ」という。御下地と書いて、しょうゆはあくまで主役にはならない。謙虚なのである。もっとも調味料だから、当たり前だといわれたらその通りだけれど……。

とはいっても、堂々と新聞広告で主役を演じた。そのためには、外国の博覧会で評価される必要があった。なにしろ万国博覧会で、世界にデビューしたモノが多いこと。ほんの一例をあげると、電信も電話も、ミシンもエレベーターもボールベアリングも、ドイツのクルップ社のでっかい大砲もみんな万国博だ。タイプライターも楽器のサキソホーンもある。しょうゆはどうか。

まず最初に出品したのはウィーン万国博。1873（明治6）年に開催され、開国後の日本が初めて参加した。これぞニッポンと、鎌倉大仏の実物大・張りぼて。もっとも会場で組み立て中、タバコから引火して燃えてしまったけど。巨大なちょうちんや、大きな花瓶なども。最高級の技巧で制作された工芸品とともに、キッコーマンも出品。受賞した。

1900（明治33）年に開催された、パリ万国博は19世紀最後で最大の規模である。場内には、動く歩道がお目見え。すべてがアール・ヌーヴォーに彩られた。ミュシャのポスターが魅惑し、ロダンやエミール・ガレの作品がかがやいた。シャンゼリーゼには、グラン・バレとプチ・パリが建てられた。セーヌ河には、アレキサンダー3世橋がかけられた。地下鉄が開通し、ギマールが設計した入り口が評判になった。

日本は法隆寺の金堂を模した歴史美術館で、古美術展を開催した。新作の染織・陶磁器・七宝・漆器など、第1級の工芸品とともに、しょうゆは野田と銚子の各銘柄がそろって出品。そろって受賞した。どのようにして審査するのだろう。それはともかく、この広告を掲出した。

「巴里萬国大博覧会に於て、左の最上醤油は名誉金牌を受領せり」

まん中に「名誉」とあり、それぞれのマークの上に、「金牌受領」とほこらしい。順番はどのようにして決めたのだろう。逆さになったキッコーマンが、もっとも安定して見える。受賞発表の通知があった直後に掲出したらしい。それぞれ醸造元のよろこびはいかばかりであったろう。

（美術エッセイスト、茅ヶ崎市在住）

（図） パリ万国博受賞の連名広告・1900（明治33）年9月掲載